



The Prize

Reiko Kinoshita



Pulitzer Prizes

Ramon Magsaysay Award

MacArthur Fellows Program

George F. Kennan Award

Thomas Cook Travel and Guide Book Awards

The International Center's Annual Awards to Distinguished Foreign Born Individuals

Malcolm Baldrige National Quality Award

Global 500

Internationale Filmfestspiele Berlin

The Prize

[プライズ]
「九つの賞」の背景

Reiko Kurosawa

木下玲子

新潮社

プライズ
——「^{この}九つの^{しょう}賞」の^{はいけい}背景

著 者——^{きのしたれい こ}木下玲子

© Reiko Kinoshita 1993,
Printed in Japan

発 行——1993年 7 月25日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

電 話——営業部 03-3266-5111

編集部 03-3266-5411

振 替——東京4-808

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-383602-4 C0095

価格はカバーに表示してあります。

プライズ——「九つの賞」の背景❖目次

プロローグ 6

プーリイツァー賞 11

ジャーナリズム最高の榮譽はいかにして選ばれるか

マグサイサイ賞 41

フィリピンに生まれた「アジアのノーベル賞」の理想

マッカーサー・フエロー 65

米国再生への情熱を受け継ぐ「天才賞」の内幕

ジョージ・F・ケナン賞 87

米国随一の戦略家の名を冠した賞はいかに誕生したか

トーマス・クック・トラベル・ブック賞 109

「旅行の父」の思想を伝える賞を生んだ英国の伝統

フォーリン・ボーン賞 135

外国生まれの米国人を讃える移民国家ならではの賞

マルコム・ボールドリッジ賞 159

国際競争力回復を夢見る米国企業の新しい挑戦のために

グローバル500賞 183

毎年百人の環境専門家を顕彰する国連環境計画の理想

ベルリン国際映画祭 205

カンヌ、ベネチアとは一線を画す「金の熊賞」の個性

世界名賞の舞台から——エピソード 227

賞を輝かせる舞台裏のエピソード、取材余話

装幀 ◆ 新潮社装幀室

プライズ——「九つの賞」の背景

プロローグ

「あのね、私キッチン（キッチン）に忘れものしてきよったと。ちよつとでいいから戻してください？」

独り暮らしの家からナーシング・ホーム（看護つき老人ホーム）に移される日、林スマさん（八十六歳）は日本語の分かる私の手に何度もすがって訴えた。忘れものなどあるはずはなかった。スマさんの二人の娘たちが家をきれいに片付け、必要品だけをトランクに詰めて車に積んであったからだ。

「ママ、listen、分かんこといわんの。せんべいもおこしも皆持つて来た。You didn't leave anything behind（何も忘れてない）だから」

そういわれるとスマさんは、車椅子の中で毛布にくるまって背を丸め、しょげた様子で頭を動かしてはうなずいていた。

そのスマさんが突然元気に歌を歌い始めたと教えられたのは、ホームに移ってから四カ月目の頃。土曜日にスマさんの好物のソーメンを持って尋ねていくと、まちかねたように陽気な歌声が部屋の中から聞こえてきた。

「ルイちゃんやーい。ルイちゃんはよい子だよーい」

末娘のルイーズさんをあやしたときの子守歌らしい。私をルイーズさんと思っている。だがスマさんは小さなころの記憶だけははっきりしていた。熊本県水前寺公園そばにある実家の住所や小学校の校長先生の名前など、驚くほどスラスラと答えた。特にソーメンを食べ、椅子ごとすっぽりと入浴した後におこしでお茶を飲めば舌がよく回った。

「パパとさとうきび畑で働きよったの。大勢のくろい人や時にはくいち（ユダヤ人）の貧しか身なりの人もおったかしら。でも日本人ひとは黙って、何をいわれても黙って我慢した。白人は怒らせたら子供たちば食わせられまっせんから。だからかしら日本の電気釜は初めてカリフォルニアで売り出されたときはうれしかったあ……。戦争が終わったあと一番うれしかったことだわ。

ひとつでよかったのにふたつも買って……。米をいっぱい入れて一度に炊いた。本当にアメリカに来てありがたかった、よかところよ。お返しはせんとねえ。だから黙って働いてきたの……」

スマさんが老衰で亡くなった後、家の寝室から五百本近い毛糸編みでくるまれた木のハンガーが出てきた。二十本ずつきれいに毛糸で結ばれていた。いくつもの和菓子の箱にぎっしりと詰まった一ドル紙幣と手紙も見つかった。

「六十五年間もお世話になったアメリカに、これでお返しをしてください」

二人の娘は母親の遺志を伝えようと、自分たちの私財も足して基金を作ることにした。こうして林スマ基金は世界でも最も小さな基金のひとつになった。三年毎にスマ基金は、日本文化を勉

強している米国人一人に奨学金を与えている。

十年以上、アメリカに暮らしていて、スマさんのような人に何人か出会った。「与える」ことのアートといったらよいのだろうか、英語でいうギビング (giving) の精神というのだろうか、そういうものに触れた。

それを体现したものとして基金とか賞があり、いつかそういうものを書いてみたいと思っていた。

世界中にいったいどれくらい有名とされる賞があるのか。ワシントンに行った時、米国会図書館 (Library of Congress) に足を延ばした。すると百科辞典大の厚さと大きさの「名賞に関する専門辞典」(Awards, Prizes and Honours) —— 国際編、北米・カナダ編という二冊を渡された。読んでいくうちに引き込まれ、ついには自分でそれを購入してしまった。それ以来行く先々で新聞社や放送局にこの「二種の神器」がほこりをかぶって置かれていると、何故だか非常にうれしくなる。

ところが色々調べるうちに「賞」を生み出し、支えている、一般市民の精神について書かれたものがほとんどないことに気がついた。

それなら「市民社会の営み」としての「賞」を書こうと思った。そういうわけでここに収めた賞は、エンターテインメント要素はそれほど重要視していない。

「賞」には二つある、と思う。

「REWARD——リワード」と「AWARD——アワード」。

「リワード」というのは例えば、西部劇に出てくる賞金稼ぎに渡される「賞金」のようなものでそれまでの業績が授賞の対象になる。日本でいえば「勲章」などがこれに近いのではなかろうか。功なり名遂げて、御苦労様というわけ。

ところが「アワード」は違う。

とても優れた才能がある。まだまだ立派な仕事をするだろう。その才能を思う存分伸ばしてもらいたい。そうしたこれからの将来性を期待して賞を与えるのが「アワード」である。

「リワード」には興味がでない。「アワード」のほうを書こうと決めた。

ちょっと冒険してみよう、そして先行投資をしてみよう、社会におけるエクセレンスの標準は自分たちでつくろう。

そういう市民社会の前向きな遊び心とコミットメント。

市民社会が「恒産」を持つことによって市民精神の「恒心」を持つ。

世界の「名賞」といわれる賞は、それぞれがそのための手段であり、メディアであり、メッセージなのである。

プ
ー
リ
イ
ツ
ア
ー
賞

ピューリツァーは誤った発音……

「何冊読みました？」

ロバート・クリストファーはまず聞いた。

「プーリイツァーの伝記から読みました」

プーという音に力を込めたこちらの発音にクリストファーは笑い出した。

ロバート・クリストファー、コロンビア大学ジャーナリズム大学院教授、『ジャパニーズ・マインド』の著者である。かつて「タイム」の日本特派員をしたこともある。中曾根康弘氏や宮沢喜一氏をはじめ日本にも友人が多い。いまは教鞭を取る傍ら、コロンビア大学ジャーナリズム大学院の七階にあるプーリイツァー賞事務局で、事務局長として十年以上賞の選考に携わってきた。プーリイツァー賞については随分書かれている。創始者のジョセフ・プーリイツァーについての文献だけで二十数冊ある。それなのに世界的に知られているこの賞の名称を間違っただけで聞き覚えがある人が圧倒的に多い。正式の「プーリイツァー賞」ではなく「ピューリツァー賞」と誤って発音される。これにまつわるエピソードは多い。

毎年、授賞発表記者会見には新聞各社はベテランを送ってくるが、中には準備不足の新米記者も混じる。

九一年の授賞記者会見での話だ。

「今年のピューリツァー賞審査で苦労した分野は？」

アイオワの「デモイン・レジスター」の新米記者がクリストファーにきいた。

「名称も正確に知らないまま記者会見に出席しているジャーナリストとの対応です」

クリストファーはそう答えた。

審査はもめる

「四月に來なくて良かったですよ」

クリストファーは私に繰り返した。

受賞者が発表になる四月は興奮とヒステリー状態が頂点に達する。この月クリストファーのオフィスと隣のスタッフの部屋は大統領特別専用車並みの厳重な警戒体制が敷かれる。発表が完了するまでクリストファーのオフィスも隣の部屋も机の上といわず、床といわず候補作品がびっしりと並べられている。これには理由がある。審査員たちの意見が割れたとき、すぐに別の候補作品を取り出せるようにという配慮からだ。審査は毎年もめにもめる。

緊張と興奮状態は審査の理事たちばかりではない。記者会見場ワールド・ルームに集まる記者

連中も同様だ。ここにはまた米国ジャーナリスト特有の自己主張の強さが渦を巻く。九一年は「ニューヨーク・タイムズ」のチームと「ロサンゼルス・タイムズ」のチームが際立ってオシャレしないでたちで現れた。カウボーイ・ブーツとラフなジャケットにウェスタン・ハットという大西部カウボーイ・ルックがロサンゼルスなら、ネクタイやポケット・チーフに流行のサイケデリック・カラーをあしらったのがニューヨークである。

身なりなどはどうでもいい、ということにはならない。ワールド・ルームに現れた途端、会場の驚きや溜め息を誘えば先手一本である。プリーツァー賞の取材だ、ほかの記事を書くより何かにつけ凝りたくもなる。集まるジャーナリストたちもこうしてまた、お祭り騒ぎを盛り上げていく。

ロバート・クリストファー自身はプリーツァー賞を取っていない。早くから選考理事会のメンバーになっていたから駄目だったといった。理事には受賞の機会は与えられていない。理事会メンバーは「ニューヨーク・タイムズ」や「ワシントン・ポスト」ほか米国各地域の有力新聞社社長、社長、学者ら三十余名からなる。「個人で取りたかつたし、出来るなら今からでも是非取りたい」といったのはあのウォーターゲート事件の鬼編集局長として有名なベン・ブラッドリー（ワシントン・ポスト）である。

これほどまでにジャーナリストを興奮させるプリーツァー賞の魅力は一体何なのだろう。米国のジャーナリストなら誰でもペンを持ったその日からプリーツァー賞を狙うといわれる。実